

れつし かぜ ぎよ い れいぜん よ じゅんゆうご しか のち かえ  
列子は風に御して行き、冷然として善し。旬有五にして然る後に反  
かれさいわい いた もの お いま さくさくぜん こ ぎよう まぬが  
る。彼福を致す者に於いて未だ数数然たらず、此れ行に免ると  
いえど なおま ところ もの そ てんち せい じよう ろつき  
雖も、猶待つ所の者あるなり。若し夫れ天地の正に乗じて六氣の  
べん ぎよ もつ おきゆう あそ もの か は なに ま ゆえ いわ  
弁に御し、以て無窮に遊ぶ者は、彼れ且た悪をか待たんや。故に曰  
しじん おのれ しんじん こう せいじん なな  
く、至人は己なく、神人は功なく、聖人は名無しと。

【大体の意味内容】

列子という人は、風に吹かれて自由気ままに逍遙し、その生き様はクールでかつこいい。

風が変わる十五日ごとに帰ってくる。彼は幸福をもたらすものを、ががつとむさぼり求  
めるようなことはしない。このことは、無理な行動を取ろうとする我執からは解放されて  
いるといえるが、まだ頼みとするものを残している、つまり吹く風に頼っているのである。

そもそも天地の真正な働きに乗じて、「陰陽風雨晦明」六氣の天候変化と融合する。そ  
うして限界のない、無限無窮の世界に遊ぶ者は、何かに頼るといえることがあるのか、いや  
何も頼まず自由でいるのだ。よって、「最高の境地に至る者には利己的な私心がなく、神人  
は俗世間で褒められるような功績とは無縁で、聖人には俗人が求めるような名誉がない」  
といわれている。

「風が変わる十五日」とは、中国の戦国時代（紀元前403年～紀元前221年）に生じた

「二十四節気」の考え方に基づいています。一年を春夏秋冬の四季に分け、さらに一つの季節を

六つに分けて、 $6 \times 4 = 24$ の「季節」に分けました。これを「二十四節気」とします。そのする

と「一気」では  $365 \div 24 = 15.2083\overline{3}$ 、ほぼ十五日と五分の二になります。これはちよびん月

の満ち欠けにも対応しており、新月から満月に十五日、満月から新月に十五日、というサイクルともリンクしていますね。月の運航と気候の変化とがこんな風に一致しているわけです。

二十四という数字は、一日の二十四時間とも一致しますが、こちらは月の満ち欠け三〇日を一つの周期として、それが十二回で一年になるという事実から、一日の昼を十二時間、夜を十二時間で表現し、合計二十四時間になったとのこと。

私たちの生活のリズムを示す様々な数字は、決して人間が勝手に決め付けた数字ではなく、自然が示してくれたものであるわけです。

こうした自然のリズムに即した生き方が、「天地の正に乗じて六氣（自然界の六つの元氣）の弁（変遷）に御し（融合し）」たものであり、「無窮（の宇宙）に遊ぶ」こととなるのだと、古人は直感していたのです。これは風の運びの様な何かを「待し」「じびどもなく、じびわら主体的

「行」<sup>ゆき</sup>を行使するじびどもなく、じびの受動的消極的他力本願でもなく、能動的積極的自力本願でもなく、こうした二項対立以前の未分化な宇宙の摂理そのもの、「道」そのものだということがよくわかります。

柳生新陰流兵法の「懸待一如」<sup>けんたいいちご</sup>という言葉を思い出しました。「懸」とは「懸かる」「しまの攻撃するじびび」、「待」<sup>たい</sup>は静かに待しじびびです。身体は「懸」、心は「待」で、敵に「先」しまの先制攻撃させることでかえってこちらが勝つ極意だとか。これは元メジャーリーガーのイチローのバッティングの極意「手を出すのは最後」ということとも通じるのでしょう。

『莊子』のこの文章のテーマが「懸待一如」だとしたら、それは「敵に勝つ」とか「ヒットを打つ」とかの目的を持たない、宇宙の一体を言うものなのだろうと思います。「至人は己なく、神人は功なく、聖人は名無し」にそれがあらわれているようです。

そのような境地に到達できたという「それが一体何なるのか」ということは、それまでですが、人間存在のありようがどこまで拡大拡張し得るものか、試してみたり努力してみたり、そのこと自体を楽しんでみれば、何か新しい知恵や可能性も生じるのではないでしようか。役に立たずかどうかは別としても、退屈な人生ではなくなるといいでしょう。